

## なぜ山に登るのか、登頂と展望の雑感

### 1. はじめに (いわゆる山について)

「なぜ山に登るのですか」良く聞かれ、決まって「そこに山があるから」と答える。評論家本多勝一氏によれば、著名な登山家マルローが一般の方からそのように聞かれ、めんどくさそうに答えたのが真相であり、かの有名な語句が一人歩きしたといったところであると。

では本当に、そこに山があれば登るのか。いやそうではない。登ることに価値がある山でなければならぬ。そうした山だから登るのである。まさに道理である。

友人は言う。「山に登っている最中、登りに専念する。登りの時間では、まったく浮き世のことを忘れて(苦しさから思考停止して)、一生懸命汗水垂らしながら登るから意義がある」という。これもまた道理である。

我は言う。登頂したときの展望のすばらしさが一段と登山意欲をかき立てくれ、苦勞したからこそ、その味わいは格別である。ちょっと気取って言えば、達成感を味わっているということになる。これもまた道理である。

現代においては、情報過多の世の中。そんな悠長なことはいっておられないのか、山を愛する若い人は激減した。世の中の若者には「何で苦しい目にあわなければならないのか」「山に登って何になる」「他に好きなことをしたい」といったように個性的で多様な受け止め方が多くなってきた。

その一方では、「だからこそ山」とか「とにかく山」といいながら、山に登る人、山を嗜む人、山を観光としてつきあう人。山について、人は実に様々のかかわりをもっている。

さらに加えれば、人生を山登りにたとえることもある。山を乗り越えてとか、山にさしかかっているとか、道の最高峰をきわめるとか。そんなことを思ったときに現実に聳え立つ山をみると、いろいろなことを思いめぐらしてもいる。

そこで本稿では、いろんな次元で山の楽しみ方、山の接し方を少し気取って考えることにした。山を題材にして何でもかんでも考えみれば、これもまた山の楽しみなり。そんなアプローチで迫りましょう。

### 2. 山の価値

山の価値について考える。深田久弥は日本百名山の選定に当たり、「山容の秀麗さ、歴史、個性」を条件としている。ただ高ければいいといった訳ではなく、品格が条件であるという。山を愛する人にとっては、やはり歴史を大事にしている。歴史というと、

長年月の間、人が山にどのように接し、どのように生活の空間に入ってきたか、いってみれば慕われの歴史である。これは地域地域に形成される風土のことであり、地域に根づいた生活空間であり、富山では立山(日本三名山)もろもろである。

このように考えると、山を見ることにより、その地域の風土を逆に知ることが出来ておもしろい。最近、そうした楽しみ方に親しみをみ出している。

### 3. 登頂において

ハイカーやアルピニストの人は、登頂により最終的にはやはり達成感を満喫するのであろう。人間、遠くを見わたすことにより、心が雄大になるのだろうか。達成感を目でみるかのようにしっかりと確かめられるのであろうか。理屈はともかく、登頂はいいものである。

では、登頂中はどうか、下山中はどうか。登頂中はゴールを目指して頑張るもの、それ一点であろう。時にはお花を觀賞しながらも。下山中はもくもくと帰宅をめざす。達成感をより安堵してゆったりと味わうのは、無事帰宅してからである。気取って言えば家に帰って貴重な人生歴史の一ページを日常世界の中で刻み直し、感動をじんわりと味わうことになる。

### 4. 観光について

山はアルピニストだけのものではない。といって多くの観光客が山に入ってくる。立山もまた、その例外にあらず、観光化されて公害に苦しんでいる。立山の自然保護の運動を実施されている方には頭が下がる。彼らの運動のおかげで、立山のマイカー規制が実現した。これがなかったら、もっともっと自然破壊は進んでいたことだろうに。

では観光客は来ない方がいいのか。雄大な景色はやはり見ておきたいものである。それこそ、アルピニストだけのものではないので、私は地元民をも含め皆さんにぜひ立山へ行きましょうと薦めている。その一方では、あれあれ、山が荒れるのではと心配もする。

ではどうするのか。よく考えてみると、問題は観光の仕方であり、観光というものが真に醸成されていないとみる。すなわち、観光客が真に山の雄大さを鑑賞し満喫しているのだろうか、もし鑑賞が十分すぎるくらいであれば、山の雄大さを汚さないようにするにはどうすべきかを当然考えるはずである。観光態度がどうのこうのではなく、マナーがどうのこうのでもなく、すばらしさ故にマナーや態度が形

成され、動かぬものとなってくるのである。ここが弱いのは、「本物に接し本物の良さを理解する」ことのチャンスと時と空間がないからである。だから、我らは商業主義にややもするとふりまわされてしまうといいたい。

今は、自然をお金で買う時代。お金を出して自然が豊富な現地に出向き、そこにおける生活を金に物を言わせて都会風に延長させるがごときの風潮がある。商業主義は不要といったところで、何かしらの弱さのみを感じる。自然の良さを理解し行動することに価値を見いだすことこそ、改善の大きな力になりうる。そう思われてならない。

## 5. 山の見方様々

富山の山を例にして、我らどのようにして山を見て感動しているのであろうか。理屈っぽく探ってみよう。

### 5.1 遠景

遠景はいつ見てもたまらなくいいものである。富山では、立山の周辺以外の街からは、立山連峰は遠くから眺めることになる。何分3000m級の山であるので、全貌が見えるには天候に左右される。従って、いつでも見える訳ではないところに観光資源として不確実性が存在する。が一度天候に恵まれれば絶景である。こうした景色は地元民にはたとえ見えなくても心にいつも見えるといった情緒的な様相を生むくらいのものである。

遠景は、実にシルエットとしてスカイラインとしてパノラマミックに雄大さを醸し出すが、もちろん奥行きはない。逆に奥行きがないからこそ広がり雄大さを満喫できる。このような雄大さが、我らの生活を時として見守っているかのようにもみえ、我らのシンボルたる事にもつながり、精神的な支柱にもなりうる。

### 5.2 頂点にたって

頂点を目指したい。素朴な気持ちだが、なぜ人間が、なぜ高い山を目指し、低い山へはあまり行きたがらないのか。高い山の山頂に立てば、遠くを見渡せ、この世の広がりや落ち着きと底知れぬ雄大さを知る。そしてまた登頂することによって苦しみあえいで登った甲斐があり、また大きな目的に対しての大きな達成感を得ることが出来る。苦勞して登頂した後には、ビールが待っている。山頂でのビールは一段とうまく、インスタントラーメンだって本当においしい。高い山ならではの楽しみである。

登頂による達成感、人生の歩みでも同じである。人生の頂点を目指す。頂点にたって初めて、その全貌を離れてみる余裕も生まれ、頂点に立ったからこそ雄大さについて次元を越えて理解や観賞ができるのである。若いときにがむしゃらに頑張っ、年齢を重ねてから体系化や後ろへの振り返りがある。いってみれば、年の功としてのもの見方が充実する。

### 5.3 中景。雄大さを満喫しよう。

立山にくる人におすすめしたいのは立山の前座に位置する大辻山(標高1360m)へのハイキングである。この山からは、立山三山、剣、大日岳、桑崎山、薬師岳、という立山連邦がパノラマとして一望でき、また、弥陀ヶ原の大地に加えて称名滝も見える。

頂上に登ってみると、展望が開け遠くまで実に雄大にみわたせる。しかし、自分の立っている山そのものは見ることはできない。当然、見たい山はその山から離れてみることになるが、これは離れすぎても近すぎてもよくない。たとえば、富山平野から立山連邦を見るように離れ(過ぎ)た場合、確かにシルエットとして屏風としてみる山の広がりや頂きは絶景であるが、難をいうと奥行きがわからないし、遠くにあることにより全体のボリュームが実感としてわからない。これに対して、(地元民でないとうわらないが)剣岳のまん前にある中山のように近すぎると、迫力がありすぎ圧倒され迫力を観賞するといったゆとりはない。

いいたいことは、近からず、遠からずということである。何も常に最高点を求めるのではなく、最高点の雄大さを目の当たりにして観賞する観賞もまた絶景なり。がむしゃらな時期を越えてくると、中規模の山に登る楽しみがしみじみと実感できた。そして病みつきになり中景の良さを知った。

## 6. まとめ

日常生活において我々は本当に楽しく生活を営んでいるのであろうか。自然を理解し美を観賞するという行為は、むしろ義務のように押し付けられるか自らも求めさせられているかのようにも感じる。そんな押し付けを跳ね除け、日頃から自然を鑑賞するという普段さが欲しい。このように考えて日常生活を営まないかぎり、自然保護といっても唐突でしかありえない。例えば(原水爆禁止運動では)夏がくれば思い出す広島長崎ということはあってはならないのである。(常に思っていなければならない)

ごく普通に自然と接し愛するという事は、結局のところ、生活の営みにおける人間性が一番問われている。観光においても、ごく普通の延長でいいのである。観光の際には、山での便利さの追求は必要無く、ハイテクや便利さという衣を脱いで自然との向きあいがあれば、すばらしさを鑑賞する感性がますます磨きがかかってくるものといえる。そして、我らにとっては、ごく普通の営みが当たり前であるという世論形成が以前にも増して必要となってくる。

追記：思うことひとつ。山は時間を越えて地域にどっしりと根をおろしている。そんな山を縄文人はどのように見て何を思っていたのであろうか。我らと同じく感動していたのであろうか。